

## 「粘土でにやにゆによ」を読んで

重症心身障害児（者）施設としては先駆の施設である「第二びわこ学園（現：びわこ学園医療福祉センター 野洲）」で、大学時代にボランティアとしての出入りが縁で就職し、退職するまでの四半世紀以上にわたり、重症児・者の粘土活動の指導に携わった元職員の著書「粘土でにやにゆによ～土が命のかたまりになった！～」を購読した。

著者は、最初は粘土で作品を作ることに拘ったが、彼らの粘土活動の中で、「やっている時の喜び、楽しみ、それ自体が『作品』であるというべきかもしれません。

具体的に『作品』として残っているものも、それは彼らが粘土と遊んだ『残りかす』のようなもので、本当の『作品』は彼らが粘土と遊んだ過程にあるのでしょうか。」と記している。

また、「彼らが好む固さに粘土を練っておくのが私の仕事、また私は、彼らが好む『おもちゃ』の提供者に過ぎません。造形という点からすれば、指導でない指導です。」と記している。

それだけに、書には彼ら一人一人の粘土活動の様子と、その時の表情の写真も数多く挿入されている。

また、今でこそ発達障害児・者という概念があるが、四半世紀前は「動く重症児」とか、「強度行動障害児」と云われていた彼らの粘土活動の中での時系列的行動変容の事例も紹介されている。

時間をかけたこの書の実践活動を知ると、障害児関係や幼児関係で粘土遊び、感覚遊びと云われる活動をしばしば目にするが、それらが大人の枠内の遊びに過ぎず、本人の自主性、主体性が如何に疎かなものかが理解できる。

「感覚遊び」、「感触遊び」とは、本質的には「子どもたちは、自分の筆、自分の指で、自分の心の底流あるものを表現し始める」ということを、十二分に実証的に示唆してくれる書でもあった。

障害児はいうに及ばず、幼児と係わる方々にも、「粘土遊び」、「感覚遊び」の本質の実証的理解の参考に、ご一読をお勧めします。

それにしても、著者同様に自分も大学時代に重症児と出会い、ボランティアとしての出入りが縁で就職し、同時期を施設は異なれど退職まで重症児と係わる仕事ただけに、ある種の共感を抱きながらも、著者のように重症児療育の一つの方法論を自分は確立し得なかったことを反省しつつ読んだ。